

Joan Massagué博士をお迎えして

間 野 博 行

高松宮妃癌研究基金第四十回国際講演会は米国メモリアルスローンケタリング癌センター・スローンケタリング研究所長のJoan Massagué博士をお招きし、「Metastasis Initiating Cells and Ecosystems (がん転移起源細胞とそのエコシステム)」のタイトルで、二〇二五年三月四日国立がん研究センター研究棟、三月六日藤田医科大学フジタホール、三月十日京都大学ニトリホールにてそれぞれ執り行われました。

細胞の増殖・がん化・転移に深く関わる因子としてTumor growth factor- β (TGF- β)ファミリーが知られていますが、Massagué博士はそのTGF- β 研究の世界的権威です。TGF- β ファミリー群の遺伝子クローニング、それぞれの特異的受容体の発見、さらにはTGF- β 受容体からどのようなシグナル伝達経路で核に刺激がたどり着くのかの解明について、これまでMassagué博士は中心的な役割を果たしてきました。TGF- β が正常細胞には増殖を抑制する方向に働く一方、不思議なことに、一部のがん細胞においては播種・転移に極めて促進的な働きをすることが知られています。がんの転移の有無が患者生命予後に大きく関わりますから、その分子機構解明はがん研究の重要なテーマです。

今回の講演では、TGF- β シグナルが一部のがん細胞においてなぜ増殖抑制効果が欠如するか、またTGF- β が特定の転写因子の発現を誘導してがん転移に働くのかについて、Massagué博士が自らの研究成果の時系列に沿って分子基盤を説明してくださいました。また最近では、他臓器に播種したがん細胞が転移先で毛細血管周囲に成着し長期生存する分子基盤についても解明されており、常に最新の解析技術を用いて、長年にわたって次々と新たな転移機構を同定するさまは大変刺激的であり、参加者、特に若手研究者に大変教育的な講演となりました。まさに記念すべき高松宮妃癌研究基金第四十回国際講演会に相応しいものと言えます。また国立がん研究センターでの講演会では、講演会前に若手研究者との個別面談を開いてくださり、若手研究者にとってまたとない経験となりました。講演会自体も、世界的権威のMassagué博士の講演を直接拝聴できると二百名近い聴衆が集まり、終了後の多数の質問にも丁寧に答えてくださりました。Massagué博士も、奥様であられるRoser Salavert博士も、これだけ長く日本に滞在するのは初めてとあって、今回の日本訪問はとても楽しく、忘れられないものになりましたと仰ってくださいました。我々にとってもMassagué博士と身近に接し、その人柄とあふれんばかりの知的好奇心に触れたのは貴重な経験となりました。

あらためまして、今回の国際講演会の実現・運営にたずさわられた高松宮妃癌研究基金の皆様、また本基金にご寄付くださった皆様方に厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

(国立がん研究センター理事長)



左から 中釜 斉博士(日本医療研究開発機構理事長)
宮園浩平博士(東京大学大学院医学系研究科卓越教授)
Dr. Joan Massagué, Dr. Roser Salavert ご夫妻
筆者、吉見昭秀博士(国立がん研究センター研究所分野長)